



「見たり、聞いたり、探ったり」No.234

通算 No.386

青 木 行 雄

新元号「令和」ゆかりの地  
太宰府・坂本八幡宮を訪ねる

新元号が平成31年(2019)4月1日発表され、5月1日から「令和」がスタートした。昭和が平成に変わった時とは大きな差があるように思う。平成になった時は何年もなじまなかったような気がしたが、「令和」は2～3ヶ月で、すっかり溶け込んだような気がする。

令和元年5月20日、「令和」ゆかりの地、福岡県太宰府の坂本八幡宮に参拝がなかった。

まず「太宰府天満宮」の場所は、福岡県太宰府市宰府4丁目7番1号にあり、ここから20分程の所に「坂本八幡宮」は鎮座していた。

先に坂本八幡宮から説明すると、

福岡県太宰府市坂本3丁目14-23にあり、主祭神は「応神天皇」、坂本八幡神社ともいうと記されていた。

この坂本八幡宮は昔の太宰府政庁跡西側の道を北へ向かい、四王寺山への登山道の入り口近くにあって、四季折々の自然の中にひっそりとたたずむ。この神社の近くに、昔太宰府の帥に就任した



※急に参拝者が多くなったので、近隣に駐車場を作る



※坂本八幡宮まで10～15分かかる。参道ではなく、一般道路。この行列が続く



※この上に神社はある。小さな新しい看板が目立つ

「大伴旅人」の邸宅があったといわれる。旅人は邸宅に山上憶良など32人の役人たちを招き「梅花」をテーマに1人1首の歌を詠む「梅花の宴」を開催した。730年(天平2)、旧暦正月13日(新暦2月8日)のことである。その時に詠まれた歌が『万葉集』に収められた「梅歌の歌三十二首」で、その序文を書いたのが旅人である。そしてその一文が新元号「令和」の典拠となったというのだ。

元号とは年に付ける名前である。2000年以上前に中国で定められた「建元」が世界初の元号とされているというが、日本の元号制度は、645年の「大化」から始まったとされ、「令和」は248番目になるという。

そして、大伴旅人の言葉。

「<sup>しよしゆん</sup>初春の<sup>れいげつ</sup>令月にして、<sup>きよ</sup>気淑く<sup>かぜやわら</sup>風和ぎ、<sup>きようぜん</sup>梅は鏡前の<sup>こ</sup>粉を<sup>ひら</sup>披き、<sup>らん</sup>蘭は<sup>はいご</sup>珮後の<sup>こう</sup>香を<sup>くん</sup>薫ず」

※現在風に記すところなる。

「あたかも初春のよき月、気は麗らかにして風は穏やかだ。梅は鏡の前のお白粉のような色に花開き、蘭草は腰につける匂袋のあとに従う香に薫っている」となる。

『万葉集』についてふれて見ると。

『万葉集』とは8世紀後半頃に成立した日本最古の歌集といわれ、約4,500首の歌が収められているという。天皇・皇族をはじめ、貴族など上流階級の人々だけでなく、<sup>さきもり</sup>防人や農民まで、幅広い階層の人々が詠んだ歌が収められており、日本の豊かな文化と長い伝統を象徴する歌集なのである。

この『万葉集』を編集したのは、前記の「梅花の宴」を開催した大伴旅人の息子・大伴家持<sup>やかもち</sup>だといわれている。宴で詠まれた歌をはじめ、九州にまつわる歌が300首以上収められており、家持が少年時代を過ごした太宰府の風景や「梅花の宴」が強く印象に残っていたのかもしれないなどと記されていた。

それでは発祥の地とされる太宰府と「梅花の宴」の行われた場所とのかかわりについて。

この太宰府の地は、7世紀後半から12世紀前半にかけて、約440～450年あまり、地方最大の役所「太宰府」が置かれ、西海道(九州一帯)の統治、対外交流の窓口、軍事防衛の拠点という重要な役割を担っていた。太宰府の長官は<sup>だざいのそち</sup>太宰帥と呼ばれ、この「大伴旅人」は727年頃(神亀4)この太宰府へ赴任してきた。

大伴旅人は政治家としてだけではなく、歌人と



※神社の上り口、この手前に神社はある。近くには民家もないが、実に静かな所で、「梅花の宴」が開かれたという所にふさわしい場所と言えそうである



※この建物が坂本八幡宮である。一躍有名となったこの付近、以前は実に静かな山村の神社であったのである

しても才を発揮した人物で、赴任した太宰府においても文人たちと交わり、山上憶良らと共に優れた歌を残したといわれる。後に「万葉集筑紫歌壇」と呼ばれる華やかな万葉文化が、太宰府の地に花開いたのである。そして前にも記したが、730年(天平2)正月13日、大伴旅人は自身の邸宅に太宰府や九州諸国の役人達を招いて宴を開催した。当時、中国から渡来したという大変高貴な花であった「梅」をテーマに歌を詠んだことから「梅花の宴」と呼ばれた。こんなことから「令和」は生れた。

それでは「大伴旅人」、太宰府の帥、すなわち長官までされた人物はどんな方なのか、生い立ちから記してみる。

今から1350年程前の飛鳥時代、665年(天智4)都の貴族である父、大伴安麻呂、母、大伴郎女の間にも生まれた。このころ日本は、外国(唐と新羅の連合軍・いまの中国と朝鮮半島の国)との戦いに敗れたばかりの頃であった。その後父安麻呂は「壬申の乱」で大活躍した。(日本を2分するような内輪の争い)旅人は武門の家の子供としてたくましく成長していった。

そして旅人は立派な大人となり、政治家として、武人として将来を期待された、37歳の時である。710年(和銅3)旅人は將軍に命じられる。この時都は平城京(奈良)の時代であった。

720年(養老4)56歳の時、大將軍として都から、南九州(今の鹿児島)へ赴任する。

727年(神亀4)63歳の時、旅人は太宰府の帥・長官となり、妻や息子の家持らも一緒に太宰府に赴任したのである。

太宰府に赴任した翌年、728年(神亀5)、愛する妻を亡くしてしまう。

旅人の友人である山上憶良は妻を亡くし深い悲しみの日々を送る旅人を和歌でなぐさめたのである。こんなことから、2人が中心になり、太宰府の地で優れた和歌がたくさん作られたようである。

730年(天平2)、旅人が66歳の時、「令和」にかかわる「梅花の宴」が開かれる。都(奈良)から赴任して3年目の春、旅人の自宅に、太宰府や、九州内の国府の役人等を招き、宴を開いたのである。その時、詠んだ和歌が32首作られた。

その宴の後、旅人は病気になるが、都から知らせが来て、朝廷の高官である「大納言」として都へ帰るように命令が来た。

731年(天平3)、大納言として都(奈良)へ帰った旅人は、活躍することなく、太宰府での日々を懐かしく思いつつ、この世を去った、67歳の時である。

その後、旅人の息子である「大伴家持」は後に奈良時代を代表する歌人となり、日本最初の和歌集である『万葉集』は父旅人と憶良の歌を中心に多く収められ、家持がまとめ作ったといわれている。

そして今、「令和」が生まれ、あらためて、『万葉集』への人気が高まっているのである。



※菅原道真公が丑年生まれで、太宰府天満宮が牛に縁が深く、これは牛の木彫像。境内には牛の像などがかなりあった

さらに、大伴旅人が九州太宰府に帥・長官として赴任してから、なんと約200年後にあの有名な「菅原道真公」も同じ太宰府に赴任したのである。そして、道真の墓所の上に社殿を造営したのが「太宰府天満宮」なのである。約200年程の差はあるが、二人とも都から遠く離れた九州で、どのような思いで暮らしてきたのか時空を超えて想像してみたいかがだろうか。

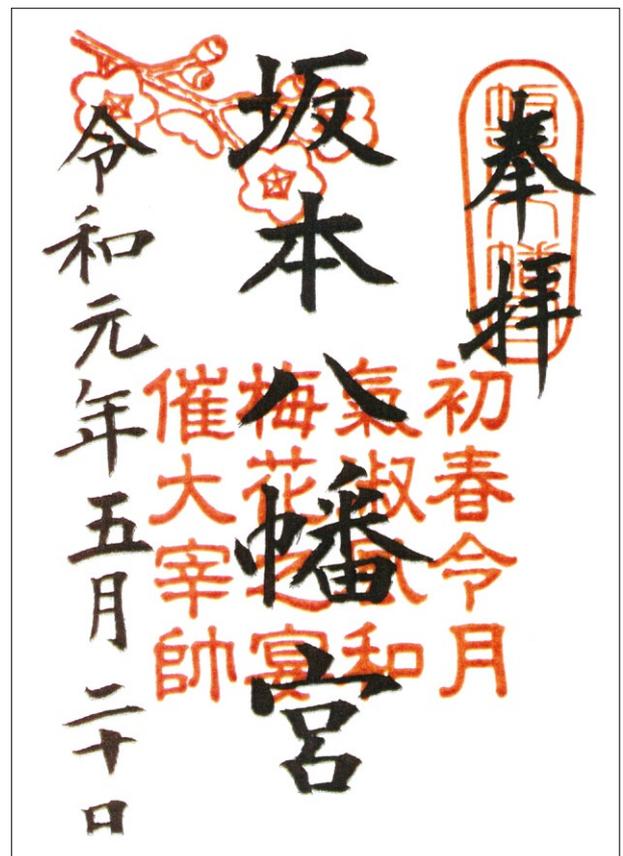
それにしても、今回の元号「令和」の決定で、「太宰府天満宮」と「坂本八幡宮」には大変大きな変化がもたらされたのである。

坂本八幡宮は、1日の参拝者が5～6人たらずの小さな神社で、もちろん宮司も常駐なし。「太宰府天満宮」から派遣されている事情から、御朱印の授与はしていなかった。それが一躍、脚光を浴びたので、5月1日午前0時から授与を始めたのである。御朱印帳など持ってきた参拝客には宮司が手書きする、もしくは書き置きしたものを配る対応をし、初穂料一律500円、1人1枚の条件だった。

その御朱印を求め、4月30日夜から8時間待ちする参拝者まで現れ、2日も書き置きの御朱印2,000枚が午後2時半でなくなるなど争奪戦が展開される中、一部がヤフーオークションに出品された。2日午後5時時点で入札は11件あって9,250円までいったという。ほぼ無人の神社に従来の1,000倍もの参拝客が殺到し、地元はびっくり仰天である。



※本殿の横にある「飛梅の木」。道真公を慕って、都から一夜で飛んできたと言えられる梅の木



※太宰府・坂本八幡宮の御朱印である  
令和元年5月20日参拝



※テントでご朱印を頂いた



※太宰府天満宮の表門の楼門、豪華な門である。境内には樟の木が多く51本もの大木があり、1,500年の木もあるという

※御朱印とは神社や寺院で、参拝した証しとしていただく印、昔は写経を奉納した証しとされた。基本的に寺社の神職や職員、氏子らが押印するもので、寺社の名前や日付が記される。寺社によって形式は異なるが、近年、御朱印集めがブームになっており、集印用の専用帳面「御朱印帳」を持参し御朱印を集めるために寺社に参拝する人が増加し、この集める女性のことを「御朱印ガール」と呼ぶそうである。



※本殿前、すぐ横に飛梅の木がある  
豪華な本殿である。急に参拝客が増えて所せましとなった

太宰府天満宮のごん権宮司が坂本八幡宮の宮司を引受け、毎日通っているという。今までは天満宮も含め、2～3人の御朱印担当で間にあったのだが、今は毎日14～5人の係りを付けて書いているが間にあわないと天満宮の宮司はうれしそうに話していた。

新しい御世が「令月」の如く清新で「和(やわらぐ)」時代となることを祈念し、毎日の仕事や生活に感謝の心を持ち続けたい。

記 令和元年7月7日